

人生案内

坂口安吾

青空文庫

新聞で読者の最も多いのは「人生案内」とか「身上相談」という欄だそうだ。

ところがここへ人生の案内を乞う投書は案外ホンモノが少なくて、一ツこんな問題で投書してみようなどと勝手な悩みを創作して投じるのが少からぬそうで、担当の記者には一見してそれと分るけれども、この方がホンモノよりも手ごろでまた面白いので、ニセモノと承知でとりあげてしまう。なぜなら、悩みの解決がこの欄の目的ではなくて、紙面随一の読み物だからだ。毎日それぞれ変化あり手ごろにたのしめる読み物でなければならぬから、案内役の先生方にも変化をつけてハッキリしたのや勇敢なのやメソメ

ソしたのや叱りたがるのや品数を取りそろえる。この先生はどうも男では面白くないようだ。人生もろもろの悩みに光明をたれジュンジュンと説き来り説き去るのが鼻ヒゲいかめしい大先生や頭をまるめた大先生では花がない。ツヤもない。女の中先生であるところに千両の値打がある。色気というものが大切だ。だからヒマな野郎どもが筆蹟に苦勞しながらニセモノの煩悶を書き綴る気持にもなるのであろう。

田舎の小さな町に数年来この投書に凝っている男があった。手打ちの支那ソバを造って売って歩く人物であるが、自宅で支那ソバを食べさせても小さな田舎町のことで日に十人前ぐらいしかでないので、三四里はなれた三ツほどの都市へ自転車で売って歩く。

専門の支那料理屋よりもただの食堂とか喫茶店だ。こういうトクイ先で一服つけていろいろな新聞を読むうちに、人生案内の熱狂的な愛読者となった。

「ウーム。今日の女杉女史は本当に泣いとる。手を合せて拝んでるようだなア。ウアー。面白えもんだなア」

「あんなメソメソしたのクライよ。大山ハデ子女史に限るわよ。ズバリそのもの」

「ウン。そうぞ。あれも時に面白い。活潑だなア。歯ぎれのいいところに色気がある。どんな顔してる先生だろう」

「変な読み方してるわね」

喫茶店の女給に軽蔑されたが、そんなことは問題ではない。喫

茶店の女給の如きやたらに厚化粧して年中何か店の品物を頼ばり、お客がいなくなるとお尻をふつてモンローウオークの練習なぞに打ちこんでいる。どこにも色気なぞありやしなない。しかるに人生案内の諸先生たるや威あり厳あり品あり血あり涙あり学あり礼儀ありそしてひそかに色気がある。くめどもつきぬ色気がある。

「よし。オレも一ツ投書しよう」

というので、昼の疲れもいとわず一週間もかかって悩める男の悲しみを訴える。自分に手頃の煩悶がないから、どうしてもニセモノではあるが、諸先生をあざむこうというコンタンではなく、いわばまア、ラヴレターのように真情がこもっているつもりだ。こういうのをセッセと書いて諸新聞へ送った。手応えなく返答が

ないのは概ね恋文の宿命であるから落胆はしない。益々血にもえて書き綴った。

はじめはA子と同時にB子が好きになりというような月並なのからはじまり、九ツのとき従兄にイタズラされた年ごろの乙女になつたり、ついには男子として二十五まで育ちながら身体の変調に気づき同性の逞しい姿をみると呼吸困難を覚え思わず胸ぶるいが起るに至つたテンマツなぞをモノするに至つた。六十何通送つたうち、三ツ採用されたが、それは実に愉快なものであつた。数年も生きのびた心境を感じたのである。

この人物、まだ若い男かというとそうではなく、二等兵で戦争に行つて捕虜にもなつてきた山田虎二郎という当年三十八のいい

オッサンなのである。むろん女房もあつて、六ツと三ツの子供もある。

これに凝りだして以来、宿六は夜業を怠る。朝もおそく、主として女房に支那ソバをうたせて彼はせいぜい売って歩くぐらいが仕事だ。売る方だけは一日も欠かさないのは出先で新聞をよませてもらふ必要があるからで、よほどの暴風雨でない限り休まない。製造は女房、販売は宿六と定まっては女房の骨折りが大変であるが、女房に割がわるいのは日本に生れた因果であるし、紙代と切手代だけのことだから、パチンコに凝られるよりはマシだと思つて女房も我慢してきた。

ところが近来商売が次第にふるわなくなつた。宿六の投書熱の

せいではなく、小資本の悲劇であるが、機械製の支那ソバが大量にでまわるようになって、その方が安いから売れなくなったのである。中には手打ちの支那ソバはさすがに味が別だと云ってヒイキにしてくれる店もあるが、そういう店に限って日に十ぐらいしかでない喫茶店などで、大口は味より安値でみんな機械製の方へ転向してしまつたから日に三十ぐらいがせいぜいということになつてしまつた。ドンブリの支那ソバ三十とちがつてただのソバだけ三十ではモウケもいくらにもならない。一家四人の口をしのごうことができなくなつた。

「転業しなきやア、もうやってけないよ」

「資本がねえや」

「だからさ。日に三百も五百も売れてたころに貯金しときやアいののに、文章の書き方、手紙の書き方、字引き、性の秘密なんて変テコな本ばかり買いこんでさ。もう人生案内はやめとくれ。ニコヨンにでもなつて、せつせと稼いどくれ」

「ウーム。ニコヨンか。大繁昌の中華料理店が不景気でつぶれて死ぬかニコヨンになるか。妻子は飢えに泣く。これはいけるな」
「なに云つてるのよ。ボケナスめ！」

女房はすごい見幕で怒りだったが、虎二郎はその言葉をよく耳にききとめ、ボケナスめと叫んで亭主を足蹴にし、ついに狂乱、庖丁を握りしめてブスリ……あわやというところで刃物をもぎつつたが、女房の狂乱と悲しみ、それを見る亭主の胸つぶれる思い

……てなことを腹の中で考えふけている。

しかし実際問題として一家を餓死させるわけにはいかないから、いろいろ職を探したあげく、他に口がないから、まさに女房の腹立ちまぎれの言葉通りにニコヨンになってしまったのである。



このニコヨンというものが生活戦線の最低線のように考えられているが、すぐにニコヨンはもらえないものだそう。窓口に並んではじめの一カ月はニコマルと称し二百円しかももらえない。二カ月目か三カ月目にやっとニコヨンちょうだいできる定めだそう

で、アブレればそれまで、これだけで一家は支えられない。女房が子供の世話をみながら内職してどうやらその日その日をくらすことができた。

虎二郎がニコヨンになって何事に最も苦しんだかというところ、新聞がよめないことだ。新聞を購読する金は彼にもないが、相棒のニコヨンにもない。新聞が読めない時はどうするかという人生案内の指南をあおぐわけにもいかないのです、ハタとこまった。

「なア、お竹。物は相談だが、お前、新聞配達にならねえか」
「あれは子供のアルバイトだよ。いくらにもなりやしないよ」

「それじゃア、ウチのガキを」

「まだ六ツじゃないか」

「六ツじやいけねえかなア。それじやア……」

と言葉をきつたが、それじやア仕方がないとあきらめたワケではない。それじやア一ツ拙者がなろうと考えたのである。ニコヨンにまで落ちぶれて貧乏のあげく人生案内を読むことも書くこともできなくては生きていくカイがない。そこで彼は新聞の販売店へでかけて行つた。販売店のオヤジは世の中には物の道理の分らない奴がいるものだどつくづく呆れたのである。

「新聞配達は子供のアルバイトだよ」

「大人の配達だって、ないわけじやアなからう」

「東京のように広い区域があつてだな。どこのウチも新聞をよんで、新規に別の新聞も読みたいような心得の人間がウジャ〜い

るところには大人の配達もいるかも知らねえ。オレんところなんざア、できれば犬に配達させたいと思つてるんだ」

「いいんだよ。つまりオレを大人と思うからいけねえ。オレを子供と思いなよ」

「給料をきいておどろくな。一時間が十円、三十分以下は切りすてだから、朝晩二十円ずつだぜ。田舎のガキにしちやア高給だが、やっぱり志願者は少い方だ」

「一日四十円か。一カ月が千二百円。アブレないから確實だなア。どうだろうね。オレは日に十五時間配達するから百五十円ずつくれねえかなア」

「朝晩の定まった時間内にキチンと配達するから新聞てえんだ」

「どうも、こまったな。じゃア、こうしよう。夜の八時に毎日こへくるから、諸新聞を読ましてもらいてえな」

「オレの店は新聞を売る店だ。タダで新聞を読まれちや商売にならねえや。タダで見せてくれるウチを探してよめ」

人生案内が読めなくては書くハリアイもない。石にかじりついても新聞を購読できるような身分にならなくちやいけないと思つたが、そんな遠大なことを考えたつて、この差し当つての悩みは救われない。

彼はつくづく世の定めを呪いまた嘆いたのである。人生の実際の悩みというものは、どうも筆にならない性質のものらしい。人生案内へ投書するために新聞が読みたいのであるが貧乏で買うこ

とができない。新聞販売店のオヤジは自分が日に十五時間働くと云つても雇つてくれない。この悩みを解決して下さいと書けばこれは偽らぬ煩悶であるが、こんなくだらない悩みは書きたくない。しかし、くだらない悩みとはまことにもつてのほかで、自分にとっては何ケガエのない切ない悩みであるが、投書家の見識をもつてすれば確かにくだらぬ悩みであるから仕方がない。紅血や熱涙したたるような大物でなければならぬものだ。

「なア、お竹。物は相談だが、お前、料理店へ奉公しねえかなア。ハリ紙を見たから聞いてみたんだが、これは一流の料理店だ。何百人も宴会できる大広間からコチンマリした四畳半まで何十と部屋のある大店だ。通いでも住み込みでも三度の食事は店でたべて

衣裳ももらって給料は五千円。ほかにチツプがあるから一万円ぐらいになるそうだ。とにかく人間は貧乏じゃアいけねえ。金をもうける工夫をして、そのまた上にも工夫をして着々ともうけなくちやアいけねえな。そうだろう」

「子供の世話を見ることができないじゃないか」

「それはオレがみるとしよう」

「じゃアお前さんは働かないつもりかい」

「イヤ。そうじゃない。子供の面倒を見ながら内職をやる。お前の内職は、なんだ」

「目の前でやってるじゃないか。針仕事だよ」

「そういうこまかいものはいけな。オレの考えでは、子供をつ

れて川なぞへ行つて、魚をつる。ヤマメやアユならいい金になる。雨がふつても、アブレるときまったものではない」

「私が働いて一万円になる口があるなら結構な話だけどき。大の男がウチでブラブラして子供の食べ物や小便の面倒まで見るのはあさましい図だよ。ニコヨンでもお前さんが働いてる方が世間の人にもテイサイがいいよ」

「お前が働いてなにがしの資本ができてしかる後にオレが商売でもはじめるようになればテイサイは立派なものだ。テイサイてえものは後々の物だよ。今はテイサイなんぞ云つてられやしないよ。なんでもいいから、もうけることをやらなくちやアいけない」

「先様で使つてくれるなら働かないものでもないよ。私だつて貧

乏はウンザリしてるよ」

「それでなくちやアいけねえ。これを人生案内てえんだ。人生のこういう時にはこういうものだということを、天下にオレぐらい深く心得ている人物はめツたにいやしない。ずツとそれを研究してきたカイがあつた。オレが人生案内してやるから親舟にのつた気持でオレにまかしときやアいいんだよ」

お竹は以前食堂に働いていた女である。支那ソバを売りこみに出入りしていた虎二郎に見染められて一しよになつたが、当時は虎二郎の支那ソバも全盛時代で、お竹にしてもこの人ならと当時は思つたのである。お竹はちよツと渋皮のむけた女だ。虎二郎とは十も年がちがつてまだ二十八。ちよツとつくれば相当見られる

女であるから、当人の身にしても、この貧乏ぐらしでこのまま老いこむのは残念な気持はつよい。

料理店へ願いでてみると、三日間のお目見得ののち、上々の首尾でめでたく採用ということになった。



料理屋へ通いは田舎ではグアイがわるかった。東京とちがって交通の便が乏しいからだ。それでも深夜の一時に料理店の近所へとまるバスがあつた。

東京を十時に出発したバスだ。これがお竹を自分の町まで二十

分ぐらいで運んでくれる。これに乗りおくれる心配はないが、この一ツ前の十一時発にはよく乗りおくれた。すると二時間ちかい穴ができる。これがよくなかった。

同じ方向へお竹と一しよに同じバスで帰る仲間が二人あつた。セツは戦争未亡人の大年増であるし、ヤスはお竹と同じ年の近年夫婦別れしたヤモメであつた。だいたいここの仲居に若い娘は少ないのである。

セツとヤスはバスに乗りおけるとナジミの客をさがしたり呼びだしたりして一時のバスまで小料理屋などで一パイおごらせる。場合によってはネンゴロになりすぎてバスにのらずにお客と消え失せてしまうようなことが少くない夕チで、一しよにつきあつて

たお竹は一人とり残されたり他のお客にしつこく口説かれたりする
ことが度重なつた。

「なにさ。私には主人がおりますなんてタン力をきるのも程々に
しなさいよ。なにが主人よ。あんなデコボコ。女房を働かせて自
分はウチにゴロゴロしてさ。原稿用紙睨んでるのはいいけれど、
小説でも書いてんのかと思つたら、人生案内の投書狂だつてね。

そんなの聞いたことないよ。私にはA子という婚約者があります
が、たまたま宴会に酔つての帰り友に誘われて泊つた赤線区域の
B子のマゴゴロを知り忘れがたくなりましただつてさ。読ませて
もらつてふきだしたよ。あれで三十八だつてね。変なのと一しよ
にくらしているもんだわよ。あんな亭主に義理立てなんて人間の

女がやることじゃアないわよ。雑種の犬とか青大将かなんかがあれでも主人と思つて義理をたてる場合があるぐらいのものだわよ。あれ以下の人間なんていやしない。義理立てなんて止しなさいよ。お客と泊つてお金もうけした方がどれぐらい利巧か知れやしない」

ある日ヤスが酔つ払つて、たまりかねて、こうまくしたてた。

ヤモメのヤキモチと見てやりたいが、実は必ずしもそうではない。山田虎二郎という存在がめつたに見かけられない珍種らしいということはお竹がちかごろめつきり感じはじめていたからであつた。

お竹は毎月五千円だけ家へ入れている。あとは自分の身の廻りの物やコツカイに使い、また子供にも時々何かを買つてやつたりしているが、虎二郎は父と子供二人の生活費五千円の十分の一で

新聞を購読し、朝から夜更けまで余念もなく人生案内の投書をア
レコレと思い悩み書き悩んでいる。

おまけに近來鼻下にチヨビヒゲをたくわえるに至った。

パチンコに凝るとか競輪に凝るといふのもこれも始末にこまる
であろうが津々浦々に同類があまたあつてその人間的意義を疑ら
れるには至らないが、当年三十八の人生案内狂、ついにチヨビヒ
ゲを生やすという存在はいかにも奇怪だ。

二人の子供を抱え、無一物の中であせらず慌てず人生案内に没
頭しているバカらしさ薄汚さ、どうにも次第に薄気味わるくなる
ばかりで、わが家に近づいてシキイをまたごとするとゾオツと
寒気がする。

雑種の犬か青大将が義理立てするばかりとはまことに名言で、お竹も内々甚しく同感せざるを得なかつた。なにもこう得意になつてウチの亭主がとか云つてるわけではない。有るものを無いとも云えずウチに宿六が待つてるからと云つただけの話だ。ヤスやセツに非難されてみると、なんとなく解放感を覚えた。

「誰に自慢できる宿六でもないけれど、行きがかりだからやむをえないわよ。私もちかごろ宿六の生やしはじめた鼻下のチョビヒゲを見ると胸騒ぎがしてね。カアツと頭へ血が上つたりグツと引いたりするのよ。これにこりたから、今度の彼氏はギンミするわよ」

お竹もすっかり人間が變つた。

怠け者の亭主をもつて苦勞した女が働きにでて陽気でゼイタクな世界に身を入れたが最後、再び暗い自分の巢へ戻れなくなるのが自然である。亭主たるものドン底の貧乏ぐらしをした際には決して女房を働きにだしてはならぬ。

貧乏すればするほど自分一人が齒をくいしばつて働きぬいて女房子供を守るべきものだ。女房を働かせるのは生活の楽な人が生活を豊富にするためにやるべきことで、貧乏ぐらしのセツパつまつた必要から女房を働きにだせば、女房が暗黒な家庭へ再び戻れなくなるのは弱い人間の悲しい定めとすら見てもよい。

家政婦や何かならまだしも、仲居とか女給とかドンチャン騒ぎの陽気な世界へ身を置けば自分がでてきた元の巢が見るに堪えず

居るに堪えなくなるのは自然の情だ。着かぎってみがいてみると、お竹はどことなくチャーミングで男の心をそそる情感が豊富であるから、言い寄る男も少くなかったが、今度はギンミしななければならぬと考えているから浮気男の口車にはなかなかのらない。

矢沢という織物屋の旦那が浮気心からではなくて真剣に惚れぬいて言いよるのが尋常ではなくクタクタになつてるオモムキがあるから、これぐらいなら安心できるなど考えた。そこで矢沢を秘密の旦那に契約して身をまかせたのである。

矢沢も毎晩女とアイビキして外泊できる身分ではないから、はじめは、彼女を自家用車で送ってくれたりしたが、お竹の方は次第に大胆になって、矢沢が帰ってもお竹は朝まで温泉マークでね

こんでしまうようになった。そこで虎二郎も次第に女房の素行を疑るようになったのである。



だんだん調べてみると織物屋の旦那がついたらしいと分つたから虎二郎はお竹を二ツ三ツぶん殴って、

「ヤイ、間男しやがったな。亭主の顔に泥をぬるとは何事だ」

「泥がぬれたらぬたくツてやりたいよ。どれぐらい人助けになるか分りやしない。お前の顔を見ると胸騒ぎがしたり虫がおきるといふ人がたくさんいるんだよ。私はね、広い世間へでてみて、お

前のようなバカな男がこの世に二人といたないことが分つたんだよ。私は今までだまされていたんだ。畜生め！ 人間のフリをしやがって。お前なんか人間じゃアねえや。雑種の犬か青大将とつきあつて義理立てしてもらえやいいんだ。出来そこないのズクニューめ。他のオタマジャクシだつてオカへあがつてジャンパーを着るとお前より立派に見えらア。間男なんて聞いた風なことを云うな。人間のフリをするな。さつさと正体現してドブの中へもぐつてしまえ」

「キサマ、オレをミミズとまちがえてやがるな。ミミズが兵隊になつて支那へ戦争にでかけられると思うか。ミミズに支那ソバが造れるはずはねえや。こうしてくれる」

「ぶったな。もうお前なんかの顔を二度と見るものか」

そのまま家をとびだしてしまった。

虎二郎も、こまった。腹は立つが子供を二人のこされて、おまけに五千円の金がいらなくなると、その日から生活にこまる。甚だ残念だが手について、あやまって、戻ってもらわないわけにいかない。また新しくお竹の身にそなわりはじめた色香にもミレンは数々ありすぎる。

虎二郎は二人の子供をつれて料理店を訪ね、会わないというお竹にまげて会ってもらって、

「先日は手荒なことをして、まことにすまない。二人も子がある仲で子供をおいてお前にでてゆかれてはオレも死んでしまうほか

に仕様がな。どうか戻つてくれ」

「お前さんがそんな風だから私はイヤなんだ。子供を三人も四人もかかえながら働いて子供を育てている後家さんだつてタクサンいるよ。男なら尚さらのことじゃないか。子供をかかえてやつて行けないから死ぬばかりだというのは肺病で寝たきりの病人やなんかの云うことだよ。お前さんのように五体健全で、働けないとはどういうわけだね。女房子供を養うのが男のツトメじゃないか。人生案内なんてえ妙テコリンなものに凝つて働くことを忘れているような妙チキリンな人とじゃとても一しよに暮せないよ」

「今まで暮していたじゃないか」

「広い世間を知らなかつたからだよ。私はもうお前さんの顔を一

目見ただけでゾツとするんだから。とても同類の人間とは思われなくなツちヤツたんだから仕方がないよ。子供をかかえてとは何事だい。子供は男の働きで育てるのが当り前だよ。子供も育てられないなら、どうか子供だけは引きとつて別れてくれと頼むがい
いや」

「女とちがつて男にはそうカンタンに口がないよ」

「なんでもするつもりなら必ずあるよ。ないと思うのはお前さんが怠け者だからよ。そこに気がつかないようだから、お前さんはタタミの上に住める身分じゃないんだよ。ドブの中へ消えちまう方が身にあつてるのさ」

「よつぽどミミズと置いてえらしいけど、実はオレはこう見えて

もシンからの人間なんだ。先祖代々人間だ」

「当り前じゃないか」

「それを知ってたら戻ってもらいたい。ホレ、この通り手をついてたのむ。今後は亭主風は吹かせない。お前が毎晩帰ってくるど熱い湯をわかしておいて背中や手足をふいてやって、夏のうちはお前がねるまでウチワであおいでやる」

「お前さんは自分が働こうという気持ちがまだ起きないのだね。私はウチワや蒸しタオルと同居したくて生れてきたワケじゃアないからね」

「分らねえ人だね。そのウチワを動かすのや蒸しタオルをしぼるのがオレという人間だから、ここが人間の値打なんだ。一生ケン

メイにそういう値打のあることをやるから戻ってくれとこういうワケだ。分つたろう」

「人間の値打は働いて女房子供を安樂に養うことだよ。ミミズはさツさと戻んな。もう二度と来ないでおくれ」

お竹は席を蹴つて立つ。障子の外で様子をうかがっていたお竹の仲間たちがたまりかねてドツと笑いだす。これ以上長居ができないから虎二郎は子供の手をひいて空しく戻つた。

その後何回となく料理店を訪ねたが、お竹は会ってくれない。自分ではダメだから友人で役場の代書をやっている弁説も立ち法律にも通じている彦作にたのんで代理に心をきいてもらつたが、ウチワや蒸しタオルと同棲するのはイヤだし、ましてミミズと同

棲するのはもう我慢ができない。自分の同棲したいのは立派に妻
子を養う人間とだけだという立派な返事である。彦作はことごと
く敬服して戻った。さっそく虎二郎に向つて、

「イヤ、お竹さんの云うのは尤も千万だ。キミの方がどうしても
よろしくない。働いて妻子を養わなくちやア男じゃない」

「いまは失業時代で口がないから仕方がない」

「そのこともお竹さんからきいたが、キミはニコヨンをやつてた
そうじゃないか。しかるに人生案内を読んだり書いたりしたいば
かりにニコヨンをやめてお竹さんを働きにだしたのだそうじゃな
いか」

「ニコヨンの収入よりもお竹の収入の方が多から、収入の多い

方をとって入れ代ったわけだ。オレが怠け者のせいではない。オレがお竹の身代りとなってお竹の仕事をしてお竹の収入を稼ぐことができないなら喜んでそうするが、身代りがきかないから仕方がない」

「お竹さんだけを働かせないで、キミはキミで働いていたなら、こうはならなかつたらうな。身からでたサビだ。心を入れかえて、今後は働いて子供を育てて、お竹さんにその働きを見せて戻ってもらうがよい」

「それまでお竹に間男させておくのかねえ」

「さ。そこだな。そこがかねての人生案内だ。今度こそはキミのホンモノの身の上をありのままに書いて、人生案内へ解答を乞う

べきだ。しかしその前に大切なのは、ともかくキミが明日から働いて、人生案内はそのヒマをみて書くようにしなければならぬということだ。オレも人生案内のその解答をたのしみに待ってるぜ」彦作はこう云いのこして立ち去ってしまった。虎二郎はホンモノの人生案内を乞うどころではなかった。

まず差し当り子供を預ってくれる家をさがさなければならぬ。ようやく料金後払い、当分はタダで里子に預ってくれる家があったので、子供を預けて、またニコヨンになった。

さて残りの紙もペンもまだそっくりしていたけれども、どういうものか、ホンモノの身の上話を書いて人生案内を乞うことができない。第一、紙やペンを見ると、ブルブルツと胴ぶるいを発し

てにわかには目をつぶってしまふ。

人生案内はニセモノの快味に限るようだ。ニセモノの快味を満喫してきた虎二郎は、ホンモノに対しての人生案内の無力さをすでに痛感することを知っていた。

人生案内の解答がどうあろうとも、人生案内の中の彼の女房とお竹とは同じ人間ではない。

解答の先生はお竹が彼をミミズ扱いにしたり、他のオタマジャクシにジャンパーをきせた方が亭主よりも立派だと断定したり、亭主に義理立てするのは雑種の犬と青大将ぐらいでタクサンだと云つたりしたことを知ってるはずがない。

「いかにホンモノの話だって、まさかそこまでは書けねえや。第

一、人生案内に凝ったあげくということとはキマリがわるくて書けやしねえ。世の中はママならねえもんだなア。人生案内てえものがニセモノに限るように、人生も人間てえものもいいカゲンの方がいいのかも知れねえな。うっかりすると、オレの見てる今の世界はみんなニセモノで、オレだけがホンモノなのかも知れねえ。空怖しいこった。クワバラ、クワバラ。人生案内の先生なんぞはムジナかも知れねえぞ。まア仕方がねえ。運を天にまかせて、ニコヨンでノラクラ生きるとしようじゃないか」

と、やや悟るところがあつたのである。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 15」筑摩書房

1999（平成11）年10月20日初版第1刷発行

底本の親本：「キング 第三〇巻第一号」

1954（昭和29）年9月1日発行

初出：「キング 第三〇巻第一号」

1954（昭和29）年9月1日発行

入力：tatsuki

校正：土井 亨

2006年7月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人生案内

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>